

大阪・水辺の遊び

いまと
むかし

今も昔も水辺が大阪人の遊びごころを誘う

「江戸の八百八町」に対して「大阪の八百八橋」。そう称されたほどかつての大阪は、木津川、尻無川、安治川、堂島川などの河川と、土佐堀、江戸堀、京町堀、道頓堀といった水路が縦横に発達し、舟運も盛んで「水の都」と呼ばれていた。川は市内交通の動脈であり、市場や雑居場がつくられ人々がにぎわい、水路を中心に産業も発達し、商都の基礎を築いていった。

「大阪の文化は遊びの中にある」といわれるが、遊びの風景も人が集う水辺にあった。江戸時代の大ヒットした旅行書シリーズ『名所図会』の『摂津名所図会』や浮世絵にも、屋形船を繰り出して遊ぶ人々の姿がいきいきと描かれ、落語や芝居の題材にも数多く取りあげられている。

水辺は海外から新しい文化が入ってくる場所でもある。大和朝廷が外国への使節の送り出しや迎接に利用し、瀬戸内海東部の重要な国際港であった難波津(現在の高麗橋、三津寺、天満橋付近など諸説あり)では、遣唐使を伎楽(面をつけた踊りとともに演じられる舞踊の音楽)で迎える式典がおこなれており、これがバレーの元祖ともいわれている。日本三大祭のひとつに数えられる天神祭は、夏の暑さもふき飛ばす熱気とパワーに溢れた大阪を代表する祭りであり、大阪の都市空間の魅力を最大限に生かした祭礼だ。この天神祭をはじめ、ネオ・ルネッサンス様式の傑作建築・大阪市中央公会堂での音楽イベントなど、今に引き継がれる祭りが生まれたのもまた、水辺である。

戦後、モーターリゼーションの影響で、いくつかの川や運河は埋め立てられ、橋や堀の名を地名としてとどめるだけになってしまった。それでも大阪の市域の1割は川などの水面であり、そこに架けられた橋は800近くにもなる。都市に残された貴重なオープンスペースである市内河川では、治水整備だけでなく環境に配慮した整備が行われている。そこから新しい視点を持った遊びが生まれたり、歴史ある祭りを復活させる動きもある。

そんな大阪に数ある祭りの中から、秋から冬を彩る祭りをまとめて紹介しよう。祭りの多くは水辺の遊びから生まれた。時は移ろいでも、水辺が遊びごころを誘い、人が水辺に魅かれる気持ちに、今も昔も変わりはない。

